みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

サベナの帰郷：
マジュンガにおけるコモロ人虐殺事件の記憶と忘却

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-05-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 花渕, 馨也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00000950

飯田卓編『マダガスカル地域文化の動態』
国立民族学博物館調査報告　103:275-296(2012)

第12章　サベナの帰郷
──マジュンガにおけるコモロ人虐殺事件の記憶と忘却──

花渕　馨也
北海道医療大学

モザンビーク海峡に浮かぶコモロ諸島は，マダガスカルと深い歴史的関係をもってきた。フランス植民地時代には，マダガスカルに統合されたコモロ諸島から多くの移民が主にマダガスカル北西部の都市部へと渡った。特に港市マジュンガにはコモロ人移民が集中し，1970年頃までに約６万人に増加したと推計されている。しかし，1976年12月，マジュンガにおいて勃発したマダガスカル人によるコモロ人虐殺事件により，多くのコモロ人が犠牲になり，生き延びたコモロ人のほとんどがコモロ諸島へと帰還することとなった。マジュンガ虐殺事件から30年以上が経ち，事件は風化しつつあるが，この事件の記憶は現在でもコモロとマダガスカルとの関係に影を落としている。本稿では，虐殺事件の経緯と社会的背景について検討するとともに，サベナと呼ばれているマジュンガからの帰還者の経験から，この事件がコモロ社会にもたらした社会的影響とその後のコモロとマダガスカルとの関係の展開について報告を行う。

1　はじめに
2　コモロとマダガスカルの交流
3　マジュンガと紛争
4　植民地化とコモロ人移民
5　マジュンガ虐殺事件
6　集合的暴力の真相と闇
7　サベナとザナタニ
8　おわりに

＊キーワード：コモロ，マジュンガ，虐殺事件，移民，サベナ

1　はじめに

コモロ諸島の村々には，しばしば彼らは「サベナ」（Sabena）と呼ばれる一群の人々が住んでいる。彼らの多くはマダガスカル語を流暢に話すことができ，サベナ同士での親しい交友関係がみられる。サベナとは，1976年12月末にマダガスカル北西部のマジュンガで発生したコモロ人虐殺事件の時にコモロに緊急に帰還してきた人々のことを指す。この事件により多くのコモロ人移民がマジュンガから逃げ，親族を頼ってコモロ諸島の各地に移住した。今では，サベナたちは村に溶け込み，日常的には他の村人と同じように生活しており，聞かなければ誰がサベナなのかはまったく分からない。

マジュンガの虐殺事件について，マダガスカル政府はほとんど沈黙を続けてきた。コモロ政府もまた，コモロの歴史的悲劇として言及しながら，公的な追悼記念などは行っていない。コモロ国内において，この事件を公的な行事やモニュメントによって集合的な記憶として残そうとする動きはこれまでなかった。コモロ社会の日常生活の中では，

一見して，この虐殺事件はすっかり風化してしまったかのように見える。

事件からすでに30年以上が経ち，サベナの多くが高齢化し，すでに亡くなった方も多い。マジュンガ虐殺事件についての記憶は，サベナの第二，第三世代へと語り継がれることがなければ忘却される時代になってきている。現在では，マダガスカルに渡ることに対する恐怖はほとんど無くなり，再びマジュンガへと帰るサベナたちや新たなコモロ人移民も増え，コモロとマダガスカルとの関係も新たな展開を見せ始めている。

しかし，サベナたちに話を聞くと，事件は当事者である個人の記憶の中にはまだしっかりと残されている[1)]。日常的にはほとんど事件について語ることはないものの，サベナたちは事件のことをまだ鮮明に覚えており，実に生々しく当時のことを語る。彼らの人生に大きな変化をもたらした事件の記憶として，そして，コモロ社会におけるマイノリティであるサベナたちの共通の記憶として，彼らにとってそれは重要な意味をもつ記憶であり続けている。そして，マジュンガ虐殺事件の記憶をどう引き継ぐのかは，この事件の真相が未だに闇の中にあるために，サベナたちにとって微妙で，戸惑う問題であるようだ。

本稿では，この虐殺事件の経緯と社会的背景について検討するとともに，サベナと呼ばれているマジュンガからの帰還者の経験から，この事件の社会的影響とその後の展開について報告を行いたい[2)]。

2　コモロとマダガスカルの交流

コモロ諸島はマダガスカルと東アフリカとの中間に位置しており，両地域を結ぶ中継地点としての役割を果たしてきた[3)]。マダガスカルとコモロ間の移動の歴史は，それぞれの民族の形成史でもあり，多くの共通性をもち，相互に深く関わりあっている。大きく分けると，東南アジア系，アフリカ系，そしてペルシア・アラブ系の移住の流れが，この地域の民族を形成してきた（デシャン 1992; シャニュー＆ハリブ 2001; Live 2003）。

マダガスカルとコモロの最初の住民が誰であったかは，アフリカ系の人々であるか，東南アジアの人々であるか，あるいは両者の混血であったのか諸説別れるところである。

東南アジアから渡来したオーストロネシア語族系（あるいはマラヨ・ポリネシア語派）の人々は，５世紀～８世紀頃までにはマダガスカルに到達したと考えられている。この年代については未だ不明であり，古くは１紀頃からボルネオ島からの移民が始まったという説や，14世紀頃までに，東南アジアからの移民が何度もやって来たとする説もある。いずれにしても，マダガスカルに渡来した東南アジア系の人々の一部は，東アフリカ海岸部やコモロ諸島を経由したと考えられている。コモロ諸島のアンジュアン島の高地には，アフリカ系の文化とは異なる特徴をもつ遺跡が見つかっている。コモロ諸島におけるアウトリガー付カヌーの使用や，米，ヤシ，バナナ，マンゴー，サトウキビなどの農

作物の特徴は，この原マダガスカル人によってもたらされたとされている[4)]。

しかし，現在のコモロ人は，東アフリカ海岸部と共通した，よりアフリカ的特徴を強くもっている[5)]。

8～9世紀頃にコモロ諸島に渡来したアフリカのバントゥー語族系の一派は，マダガスカルにもその痕跡を残している。マダガスカルでは，その正体については謎の多いヴァジンバと呼ばれる先住民はアフリカ系であり，その後からやって来た東南アジア系の人々が次第に優勢となり，その混血により多様な民族が次第に形成されてきたという伝承もある。

10世紀前後から東アフリカ海岸部に移動してきたペルシアやアラブ系の人々の影響も両地域で強く見られる。コモロ諸島では，ペルシアやアラブからのムスリムの移住により，先住民のアフリカ系住民との混血が進み，東アフリカ海岸部のスワヒリ文化と類似した言語と文化が築かれる。少なくとも13世紀頃までに，ペルシアのシーラージの人々が東アフリカ海岸部に渡来し，現タンザニアのキルワに王国を築き，ザンジバル島とともにコモロ諸島は属領としてキルワ王国によって支配されるようになる。16世紀頃に書かれたとされる『キルワ王国年代記』によれば，10世紀頃に東アフリカに漂着したペルシアのシーラーズ出身の王子によって王国が築かれたと書かれている。キルワ年代記では，1506年に，モハメド・ベン・ハイーサ（Mohamed ben Haïssa）に率いられたシーラージの船団がコモロ諸島にやって来て，その後スルタン領を築いた。グランドコモロ島は12のスルタン領に分裂していた。アンジュアン島はシーラージのスルタンとアラブのスルタン領があり，モエリ島とマヨット島はアンジュアン島のスルタンの属領であった。シーラージの貴族階級の支配は，ザンジバル，イエメン，オマーン，マスカットなどからのアラブ人の別の王子の渡来により強化された。

また，アラブ人も奴隷，象牙などを求めて早くから東アフリカ海岸部，コモロ諸島，そしてマダガスカルに進出していた。アラブ人は古くからマダガスカルやコモロ諸島について知っており，9世紀頃までにコモロ諸島やマダガスカル各地に定住するようになり，11～12世紀までには各地に港湾都市を築き，インド洋交易に携わるようになった。コモロ諸島やマダガスカルはインド洋の交易網の拠点となり，15世紀頃からは，インド洋西域で活動するアラブ人商人によるアフリカ人の奴隷貿易が行われ，スルタンが統治していたコモロ諸島やマダガスカル北西部にも現モザンビークのマクア人（Makoa）やマコンデ人（Makonde）などの多くの奴隷が連行された。彼らはコモロ諸島で人口の多くを占めるようになり，奴隷貿易が廃止されてからは，混血によりコモロ人に吸収された。また，1877年の奴隷制廃止後，その一部はマダガスカルに渡り，サカラヴァ人などと混血した。

3　マジュンガと紛争

すでに7世紀頃にはマダガスカル北西部のアフリカ系住民とアラブ人との交易があったとされる資料もあるが，10〜12世紀頃には，東アフリカ海岸部やコモロ諸島に渡来したペルシアやアラブの人々の一部が，早い時期にマダガスカル北西部，そして南東部にまで進出した痕跡が残されている。彼らはマダガスカル北西部に住み，「海の民」という意味のアンタラウチァ（Antalaotra）またはアンタラウツェ（Antalaotse）と呼ばれ，東アフリカ海岸部，コモロ諸島，さらにはアラビア半島との交易を行う航海士であった（Covell 1995）。彼らの起源についてもまた謎とされているが，東アフリカ海岸部やコモロ諸島においてアフリカ系の人々と混血したペルシアやアラブ系の商人が移住してきた末裔であるか，あるいは彼らが直接的にマダガスカルに進出し，そこで現地のマダガスカル人と混血した人々ではないかとされている。現在，アンタラウチァだとされる人々には，サカラヴァ族に属するアラブ起源をもつ一集団としての認識をもつ人々もいる[6)]。マジュンガを中心にしたブエニ（Boeny）県（マジュンガ地域圏）に住むアンタラウチャ人によれば，彼らは7〜8世紀にペルシア湾を出てマダガスカル西部に移住してきた集団である。彼らの一部は，マダガスカル南東部のアンタイムル（Antaimoro）まで進出し，イスラムやアラビア語の痕跡を残している。アンタイムルの人々は，アラビア文字で記されたマダガスカル語のスラベ（Sorabe）という文書をもっている。

おそらく，コモロ人の祖先とアンタラウチァは密接な関係をもっていたと考えられる。例えば，マジュンガのアンタラウチェはスバイヤ（Sobahya）と呼ばれる独特な縞模様のはいった布を伝統的衣装として結婚式などの行事で身に着けるが，この布は，グランドコモロ島における伝統的衣装とされているものと同じ種類のものである[7)]。

考古学的調査によれば，彼らはマダガスカル北西部のヌシ・ベ近郊のマヒラカ遺跡（Mahilaka，9〜14，15世紀）や，ブイナ湾近辺のマジュンガに近いランガニ（Langany，15〜18世紀），キンガニ（Kingany，15〜16世紀），そして北東部アンツィラナナ州のイルドゥ（Irodo，9世紀，および12〜14世紀），ヴヘマール（Vohemar，13〜17世紀）などにも住んでいたとされ，イスラム様式の生活文化をもっていた（Vérin 1986）。彼らは東アフリカ海岸部やコモロ諸島との交易を行い，14〜17世紀に繁栄したと推測される。彼らはマダガスカルの原住民と混血し，その文化に大きな影響を与えたとされる。16〜17世紀以降に勃興したマダガスカルの王国の形成や，社会の位階制の成立にはアンタラウチァなどアラブ系の人々の影響が大きかったのではないかとされている。

アンタラウチァはマハザンバ湾（Mahajamba）のランガニ周辺に住み着き，1715年頃には，ベツィブカ川（Betsiboka）の河口にスワヒリ語で「花の町」（Mji angaia）を語源とするマジュンガ市を築いた。17〜18世紀には，サカラヴァ人が次第に北西部の諸首長国を統合してサカラヴァ王国を形成し，その後，北のブイナ王朝と南のメナベ王朝

にわかれた。マジュンガはブイナ王朝の首都となり，アンタラウチァはサカラヴァ王国の商業活動の中心を担った[8)]。この当時から，マジュンガには，アラブ人やインド人のほか，奴隷としてモザンビークから連れて来られた多くのマクア人，そしてコモロ人が住んでおり，インド洋西域における海運による商業網の拠点として，多様な民族が集まるコスモポリタンな社会として発展した。

一方，マダガスカルの側からコモロ諸島へと移住する動きもあったようだ。伝承によれば，1505年（または1527年），サカラヴァの王女ディヴァ・マメ（Diva Mame）に率いられたサカラヴァ人がやって来てマヨット島南部に住み着いた。マヨット島では，今でも人口の25％程度がマダガスカル語系の方言を話している。彼らのマダガスカル語方言は，アンタラウチャ，ベツィミサラカ，サカラヴァの言語に類似している。

16〜17世紀にかけて，コモロのスルタンたちはマスカレーニュ諸島のプランテーションへの奴隷の輸出など，インド洋交易により繁栄を誇るようになるが，スルタン間の争いが激しく続き，コモロはヨーロッパの航海士によって「戦闘的スルタンの諸島」（archipel aux sultans batailleurs）と呼ばれていた。スルタン間の戦闘により疲弊したコモロ諸島に対し，18世紀末から19世紀初頭にかけて，奴隷狩りを目的としたマダガスカル人の襲撃が行われた[9)]。この時期，東部のベツィミサラカ人やサカラヴァ人，ヨーロッパの海賊の子孫といわれるザナマラータ（Zanamalata）と呼ばれる一族から編成された300〜500の大船団が，コモロ諸島をたびたび襲撃し，略奪や奴隷狩りを繰り返した。1780年には，アンジュアン島のドモニが破壊され，1805年にはグランドコモロ島のイコニが襲撃された。この襲撃によるダメージは大きく，スルタンたちはザンジバルのスルタンや英仏の政府に救済を求めた。1816年，アンジュアン島のスルタン・アブダラ一世はムツァムドゥに要塞を築き，マダガスカル人の襲撃に備えるとともに，ルイ18世の保護を要請した。スルタン間の戦争とマダガスカル人による襲撃により衰退したコモロのスルタンは，領土獲得のために進出してきていたイギリスやフランスによる保護領化，そして植民地化への道を開くことになる。1917年10月23日，イギリスとマダガスカルの間で条約が調印され，ラダマ一世（Radama Ier）がコモロに対する攻撃を止めるように声明を出すことで襲撃は終了した。

この時期には，マダガスカルから２人の王族がコモロ諸島にやってきている。メリナの王族であるラマネタカ（Ramanetaka）は王家の継承争いに敗れ，親交のあったアンジュアン島のスルタン・アブダラを頼ってきた。アブダラはラマネタカを属領であったモエリ島に派遣し，その後ラマネタカはイスラム教に回収し，1888年にスルタンとなり島を統治した。

一方，マダガスカル北西部はメリナ王国の進出を受けた。マジュンガ市において繁栄していたサカラヴァ王国は，1824年にマダガスカル北西部に進出してきた中央高地のイメリナ王国のラダマ一世によって占領され，1895年までメリナ王国が覇権した長官と軍

隊によって統治された。メリナ人は丘の上にアンヂューヴァ（Androva）と呼ばれる要塞を築いた。サカラヴァ人による抵抗は続いたが，1835年にアンヂアンツーリ王（Andriantsoly）はコモロ諸島に100名ほどの家臣とともに亡命した[10)]。アンヂアンツーリ王は，アンジュアン島のスルタンによってマヨット島の統治を認められたが，1841年，サカラヴァ王族でヌシ・ベに逃げていた姪にあたる女王ツィウメク（Tsiomeko）がいくつかの島（Nosy Be, Nosy Faly, Nosy Mitsio）をフランスに譲渡したのにつづき，アンヂアンツーリ王はフランスに島を譲り渡した。1843年，海軍司令官のパソ（Passot）がマヨット島を買い取った。

メリナ人に支配されたマジュンガ市は，海上交易を主導してきたアンタラウチャ人とサカラヴァ人の２つの民族コミュニティの周縁化によって経済的に衰退した。その代わり，1880年代に多く移住してきた新興勢力としてカラナ（Karana）と呼ばれるインド・パキスタン人が台頭するようになった。カラナとは，17世紀末頃にインド北西部のグジャラート地方から移動してきた人々で，主にシーア派のムスリムである。一方，同じくインドからの移民であるが遅れてやってきたヒンドゥー教を信仰する人々はバニアン（Banian）と呼ばれている。

以上のように，コモロとマダガスカルの間には複雑な交流と浸透の歴史があり，特に，多様な民族が集まる港市マジュンガはその中心だった。

4　植民地化とコモロ人移民

フランスによる植民地化以降，マダガスカルとコモロは新たな関係に入る。19世紀半ばには，マダガスカルとコモロはともにイギリスとフランスによる領土争奪の対象となる。フランスは1843年にマヨット島を買収した後，1886年までに他の島のスルタンとそれぞれ保護領化の条約を結ぶことで実質的にコモロ諸島全土を植民地化した。植民地総督府はマヨット島のザウジに置かれた。また，フランスは1894年にマジュンガに上陸し，1895年には首都アンタナナリヴを陥落し，1896年にマダガスカルを植民地化した。

その後，1908年にコモロ諸島はマダガスカル，フランスのマダガスカル総督府の管轄下に置かれ，その後，1914年には正式に「マダガスカルとその属領」（Madagascar et dépendances）としてフランス植民地マダガスカルの一部に併合された。これにより，マダガスカルとコモロ間の移動が自由になったことと，両地域の間の開発の進展のちがいによる格差が，コモロからマダガスカルへの移住を促す要因となった。マダガスカル植民地の一地方とされることで，コモロはフランスの植民地行政の中心から外れ，開発は後回しにされた。そのため，コモロ人にとって開発の進むマダガスカルは経済的に魅力的な土地となった。属領化により，職を求めてマダガスカルに出稼ぎや移住に来るコモロ人が増加し，また，すでにマダガスカルに移住していたコモロ人に大きな影響を及

ぼすこととなった。マジュンガでは1930年代から産業化が進み，労働力の需要がさらにコモロ人を引きつけることになった（Ibrahim 2007）。

フランスにより植民地化された1895年以降，マジュンガの町の民族的構成には急激な変化が起こった。さまざまな新たな移民集団が，職を求めてマジュンガに流入してきた。コモロ人，北部内陸のツィミヘティ人（Tsimihety），マダガスカル南部や南東部から来たベツィレーバカ人（アンタイサカ人 Antaisaka や，アンタイムル人 Antaimoro などの総称）[11]，中央高地南部のベツィレウ人（Betsileo），中央高地北部のメリナ人（Merina），南端部のアンタンヂュイ人（Antandroy），そしてフランス人などが移住し，多民族的なコスモポリタンな街が形成された。

1960年にマダガスカルが独立を果たすまで，コモロ人移民の数は増え続けた。確かな統計資料はないが，推計によれば，1970年代初頭には約 6 万人のコモロ系の人々が北西部のディエゴ・スアレス，ヌシ・ベ，マジュンガなど海岸部の都市に住んでいたとされる。かつて，マダガスカルの初代大統領ツィラナナは，コモロ人をマダガスカルの19番目の民族だと言ったこともある。

マジュンガ市のマハビブ地区（Mahabibo），フィウフィウ地区（Fiofio），ツァララヌ地区（Tsararano）はコモロ人の人口密集地域であり，サカラヴァ人，ツィミヘティ人，メリナ人などと混住している。特に虐殺事件の中心地となったマハビブ地区にはコモロ人移民の半数近くが住んでいた。現在でも，マジュンガは「コモロ人に植民地化された町」とも言われている。

多くのコモロ人は質素な暮らしをしており，守衛やパン焼き，料理人などの仕事で稼いだお金を，故郷の村で行うアンダの資金として貯金していた。植民地期のコモロ人は，現地のマダガスカル人からはムスリムを意味する「シラーモ」（silamo）と呼ばれていた。多くのコモロ人は，低賃金の肉体労働などに従事していたが，一部の成功した者は土地を買い取り地主や家主として裕福な生活をするものもいた。また，フランス植民地政府の下級官吏や警官や軍隊に任用されたものも多かった。マダガスカルにおける植民地抵抗運動が活発化した1940年代には，雇われ兵によるコモロ人部隊が存在し，フランス軍に従軍して反乱の鎮圧にあたった。そのため，現在でもマダガスカル人は，コモロ人に対して恨みを残しているとも言われる

1960年にマダガスカルが独立すると，コモロ人移民は，マダガスカル国籍かフランス国籍かを選択することになり，多くのコモロ人移民はフランス国籍を取得する選択をした。しかし，独立後しばらくは，マダガスカル政府の外国人に対する政策はゆるやかなものであり，ほとんどのコモロ人は以前と変わらずマジュンガに留まった（Celton 2007: 184-185）。しかし，1972年に初代大統領ツィラナナ政権が失脚し，ラナマンツア将軍による暫定政権体制が始まると，政変の中で排外主義的な空気が強まり，1973年にマダガスカルのフランス人がほとんど撤退するのとあわせて，フランス国籍をもつコモロ人は

マダガスカルを去り，コモロ人移民の数は減少した[12)]。

それでも，1976年の虐殺事件当時におけるマジュンガ市のコモロ人移民の数は5万人を超え，マジュンガ市の人口の半数，あるいは3分の1から3分の2を占めていたとする推計（Celton 2007: 186）があるほど，マジュンガのコモロ人の数は多かった[13)]。当時，ラバトワール地区（L'abattoir）にはグランドコモロ出身者が多く，アンブアブアラナ地区（Amboavoalana）やチァララヌ地区（Tsararano）にはアンジュアン出身者が多く住んでいた。グランドコモロ島出身者は現地でアンズズ（Andzoudzou）と呼ばれていた。

マジュンガ市のコモロ人は，マジュンガに集まる多様なマダガスカルの民族やインド系のカラナなどと比べ，特別に経済的に優位にあるわけでも，政治的な力をもっていたわけではない。しかし，コモロ人移民の強い集団的結束は他の民族にとって「コモロ人」をマジュンガの特別な集団として認識させていたという（Gou 2001）。

5 マジュンガ虐殺事件

多くの証言によれば，その虐殺事件は突如として発生し，数日間のうちに一気に広がった。確かに，後述するようなコモロ人に対する敵意や嫉妬といったものがマダガスカル人の間に存在していたようである。しかし，前触れとなるようなコモロ人とベツィレーバカ人との対立はそれまで，少なくとも表面的には発生していなかった。グーによれば，マダガスカル語で「騒動」を意味するルタカ（rotaka）と呼ばれる，1976年12月19日に発生した事件の経過は以下の通りである（Gou 2001）。

1976年12月19日，日曜日，マジュンガ

アンテサカ系のベツィレーバカ人の8歳の子供が，グランドコモロ島シンガニ地方のンドゥジュ村（Ndudju）出身であるコモロ人家族の家の庭に2度大便をした。家の主人は怒り，その大便を子供になすりつけた。ベツィレーバカ人にとって，それは重大な穢れであり，穢れた者とその子孫を家族の墓から除外しなければならない。それを清めるためには，ゼブ牛を供犠し，金の供物を捧げる伝統的儀礼が必要である。子供の親族は清めの儀礼を行うため，そのために必要な牛をコモロ人家族に要求した。当初，コモロ人家族が支払いを拒むと，その牛の数はさらに増やされた。

20日，月曜日

事件はマハビブ地区の警察署にもちこまれた。しかし，コモロ人が，伝統的習慣によって義務とされる償いを行うことを認めたとき，虐殺はすでに始まっていた。地区長と憲兵隊長は不在だった。虐殺を行ったのはベツィレーバカ人だけだとする証言もあるが，

その他にベツィミサラカ人やアンタンドゥルイ人など複数の民族がかかわっていたとする証言もある。

21日，火曜日

殺人者は執拗にコモロ人を追い詰めた。マハビブ，マハヴキ，ツァララヌ，ツァラマンヂュスの各地区は包囲され，コモロ人はラバトワール地区に連行され，集められた。そこで殺人者は山刀や投槍，鉄の棒などで冷酷にコモロ人を殺し，その首を切り落とした。証言によれば，殺人者は「強くなるため」に明らかに麻薬を服用していた。彼らはモスクを襲撃，破壊し，コーランを冒涜し，コモロ人の家を破壊し，火をつけた。

家の戸や車に張られた緑や白の印によって，彼らはマダガスカル人の家を用意に区別できた。虐殺は次第に広がり，治安部隊には介入の指示がなかった。治安部隊が荒れ狂ったベツィレーバカ人を散らすために，催涙ガス弾を用いたのはもっと後になってからである。郡長は車に隠れながら，沈静化を勧めるために拡声器を用いたが，なんの効果もなかった。外出禁止令が夜に出されたが，暗殺者は自由に動き回っていた。

22日，水曜日

家々が順番に調べ上げられ，生存者は追い出された。再び捕まれば，彼らは畑で殺された。時には治安部隊の目の前で殺人が行われた。アンタナナリヴの当局は，マジュンガの郡庁に戒厳令をしくことを決定したが，家に隠れているコモロ人に対するベツィレーバカ人の集団による襲撃が続いた。アンタナナリヴとディエゴ・スアレスから，沈静化のために軍隊が急派された。

23日，木曜日

静けさが戻った。しかし，ベツィレーバカは武器をもち徘徊しており，マジュンガの町はまだ恐怖につつまれていた。ベツィレーバカを支持しない他の民族は町を去った。

鎮圧部隊が介入したのは，やっとこの日になってからである。

24日，金曜日

コモロ政府の代表団が到着し，内務省大臣や地方長官と話し合いがもたれたが，町に入ることはなかった。

25日，土曜日

ベツィレーバカが奥地に撤退し始め，マジュンガには静けさが戻った。

26日，日曜日

ベツィレーバカは全てのコモロ人が去ることを要求した。ツィミヘティやメリナ，サカラヴァなどの人々は，それぞれの事情により町を去った。

その後，年末にかけて事態は収束したが，マジュンガの町は破壊され，コモロ人は軍隊のキャンプに避難生活をさせられた。1ヶ月の間，マジュンガの緊張状態は続いた。

以上が，事件のおおまかな経緯である。この事件による死者の数は情報源によって異なっており，いずれにしても推計でしかない。死者数に関してはマダガスカル側の数百という数字に対し，コモロ側は1500〜2000名という推計を出している（Vérin 1988: 76）。それに対しマダガスカル側の死傷者は数十名に留まる。また，1977年1月半ばまでに，約16,000人のコモロ人が，財産をほとんどもたないままコモロに帰還した。避難民はコモロ政府の発表によれば約16,000人であるが，統計的に把握されてない人数も含めるとは約20,000人（Mohamed 2007）人という推計もある。

6 集合的暴力の真相と闇

マジュンガ市で発生したコモロ人虐殺事件についての研究には，シャニューとハリブ（2001），セルトン（Celton 2007），グー（Gou 2001），モハメド（Mohamed 2007），ラフィディソン（Rafidison 2007），ヴェラン（Vérin 1994）などがある[14]。それらの議論では，虐殺事件の直接的きっかけとなった家族間の喧嘩は偶発的なものであったが，大規模な虐殺へとエスカレートした背景には，当時のマジュンガにおける社会状況の中で，コモロ人移民に対するマダガスカル人の敵意があったことを指摘している。

マジュンガにおけるコモロ人移民は，そもそも故郷の村できわめて重要な意味をもつアンダ（Anda）やシュング（Shungu）[15]と呼ばれる年齢階梯制度に基づく伝統的結婚式を挙げるため，その資金を稼ぐべく渡来したものが多く，非常に倹約家で，小銭を貯めることである程度の経済的基盤を築き，土地や家を購入して家主として生活する者もいた。また，コモロ人は反植民地的感情をもつマダガスカル人でなく，しかも「誠実で勤勉」という評判により，植民地行政府により地方の役人や警察官などとして雇用されたり，フランス人の企業に雇用されて監督の立場に就いたりする者も少なくなかった。特に1970年代になると不況により労働者の雇用状況が悪化していたため，コモロ人のそうした経済的立場に対する妬みが事件の背景にあったという指摘は多くの証言によって裏付けられている。

シャニューとハリブ（2001: 108）によれば「マジュンガの人口の半分近くを占めていたコモロ人はイスラム教徒であり，それゆえ一般に節度をわきまえており，裕福になり

たいという強い意志をもって労働者として移住してきた。彼らはしばしば職場の部長や監督などの役職に就き，より貧困な人々の恨みを買う職業に従事した。倹約家である彼らは，マダガスカル人が賃貸している家の所有者であることも多かった」としている[16]。このようなコモロ人に対し，マダガスカル人が妬みや対抗心をもっており，特に，同じく移民集団でありながら貧しい階級にあったベツィレーバカ人の敵対意識は強かった。コモロ人が他のサカラヴァ人や，ツィミヘティ人，メリナ人などとどのような関係にあったかはよくわからないが，70年代にナショナリズムが強まり，全国民を統一するマダガスカル化や移民排斥の動きも出てくると，コモロ人移民を不良外国人や犯罪者のように見なす人々もいた。

コモロ人の方でも，異教徒のマダガスカルに対する軽蔑的態度があった。コモロ人は，マダガスカル人に対し，ネズミやテンレックや猫，動物の死骸などを食べる，コモロでは近親相姦にあたる性交が認められている，服を洗わない，大便をした後に洗わずに木片でふくなどのイメージをもっており，“Mbushi madzi（sale Malgache”といった表現が使われるなど，マダガスカル人は「汚い」，「粗野」，「野蛮」だとする偏見があったという（Mohamed 2007: 50）。マダガスカル人の中でも貧しい階層にあるベツィレーバカ人に対しては，そうした偏見が特に強かった。

この虐殺事件の背景に明らかな宗教的対立は見られないが，コモロ人に対する敵意に，宗教的集団としてのコモロ人のまとまりに対する脅威が含まれていた可能性をセルトンが指摘している。マダガスカルの中でも最もイスラムの特徴を強くもつマジュンガのイスラムの中心にコモロ人がいる[17]。マダガスカル人のあいだで，コモロ人はイスラム教徒を意味する「シラーモ」と総称され，蔑視される傾向にあったという。強い紐帯をもつムスリムの集団としてのコモロ人は，マダガスカル人にとっては強い結束力をもつ集団として脅威に感じられていたという可能性はあるだろう。

さらに，コモロ人を植民地側の民族とみなすことで，対立感情をもつマダガスカル人がいたことも指摘されている。セルトン（Celton 2007: 183）の指摘では，1976年の問題は，ナショナリストの目覚めによるマダガスカル人とコモロ人との関係の悪化に由来するもので1972年に始まるが，さらにその起因は1947年の，植民地政府への抵抗運動による「政治の目覚め」にある。1947年３月29日から1948年末まで，植民地政府に対する武装闘争が続き，厳しい鎮圧により何千人もの死者が出たが，この当時からフランス軍に雇われ兵として雇用されたコモロ人部隊が編成され，反植民地運動の反乱の鎮圧にあたった。マダガスカル人はコモロ人のことを‘colonisateur’と言うこともあったという（Celton 2007: 195）。

植民地側の民族としてのコモロ人に対する敵対意識という問題は，1972年以降のマダガスカルの政治状況と深く関わっている。1960年６月26日，マダガスカル共和国が独立し，ツィラナナ大統領による第一共和制政権がはじまった。しかし，フランスに依存し

た経済は低迷が続き，1972年にツィラナナ大統領が３選されると，それに不満をもつ人々による暴動が発生し，ツィラナナは陸軍のラナマンツア将軍に全権を委譲した。1972年から75年にかけての，ラナマンツア将軍による政権では，73年にフラン圏から離脱するなど，反植民地主義やナショナリズムが強まり，フランス人をはじめとする外国人排斥の動きが強まった。1975年６月には，社会主義政策をかかげるラツィラカ政権が誕生し，同年12月には新憲法の採択により第二共和制がはじまると，ナショナリズムの傾向はさらに強化された。マジュンガでの事件は，ラナマンツア政権からラツィラカ政権への政権交代が起きた直後に発生したのである。

このような政変の時期にマジュンガでの事件が起きたことは，この事件が単に偶発的に発生したものではなく，何らかの政治的な裏工作が行われたことによって発生したのではないかという憶測を生み出している。

実際のところ，事件前のコモロ人とマダガスカル人との関係は，多くの証言によれば悪いものではなかった。ザナタニと呼ばれる，コモロ人とマダガスカル人の混血が多くいることが示すように，多くのコモロ人男性がマダガスカル人の女性と結婚していた（逆に，コモロ人の女性がマダガスカル人の男性と結婚することは少なかった）。多様な民族が混住しているような状況の中で，コモロ人と他の民族との対立も無かったという証言もある。また，単なる家族同士の諍いが，なぜ短期間のうちに，あれほどの死者を出すような組織的な襲撃を可能にしたのかという疑問も残されている。コモロ人を狩り出し，一箇所に集めて殺すようなやり方は，あらかじめ計画的に組織されたものだと考える者も少なくないという。そのため，この事件はなんらかの政治的陰謀により計画されて引き起こされたのではないかというさまざまな陰謀説も根強くあるのだ。

ラツィラカの政府が事件発生から素早い対応をすることなく，治安部隊の派遣が遅れただけでなく，軍隊や警察は虐殺を止めることなく傍観していた，あるいは手助けしていたという証言もある。マダガスカルが独立した1960年以降，ツィラナナ大統領の政権時代には，コモロ人移民は比較的寛大に受け入れられ，植民地時代に導入された資本主義の恩恵を受けてきた。マジュンガ市で政治的にも経済的にも力をもっていたコモロ人は，ラツィラカ政権にとって１つの脅威であり，ラツィラカ大統領は北西部における暴動の情報を早くに得ていたにもかかわらず，それをわざと放置したのではないかとも言われている。あるいは，ラツィラカ政府が，ナショナリズムによる外国人排斥のスケープゴートとして，外国人移民が多く住み，まだツィラナナを支持する一派が残っているマジュンガの中でも，マダガスカル人から植民地側とみなされ，反感をもたれていたコモロ人を標的とした襲撃計画を工作しという積極的な陰謀説もある。

陰謀説の中には，コモロ人の間で密かに噂されているアリ・ソワリヒの陰謀説というものもある。それは，コモロにおいて極端な社会主義革命を強行するアリ・ソワリヒが，彼に抵抗する勢力の拠点となる恐れがあるマジュンガ市に住む数万人のコモロ人を帰還

させるために裏工作を行い，マダガスカル人を使い暴動を組織的に引き起こしたという，かなりあり得ない説である。コモロ人が出て行くよう脅かす程度の作戦のはずが，ベツィレーバカの暴力行為が予想外にエスカレートしてしまったというのだ。

一方，アリ・ソワリヒは，この事件の背景にフランスや南アフリカの陰の勢力による陰謀をかぎ取っている（Vérin 1994: 182）。マヨット島のコモロ人とマジュンガ市のコモロ人との政治的結びつきや，社会主義体制をとるマダガスカルとコモロとの関係を妨害する意図や，あるいは反植民地主義を強めるマダガスカルに対する牽制といったことをほのめかしている。

これらの陰謀説はどれも闇の中にあり，その真相は不明である。現在でもそのような陰謀説がささやかれるのは，なぜあれほどまでに大規模で，しかも組織立った虐殺が短期間に実行されたのかという疑問に対する答えが事件から30年近く経ても不明なままであるからだ（Gou 2001）。事件後30年にあたる2006年12月に特集記事を組んだコモロの月刊紙 Kashkazi（Kamar'eddine 2006）では「マジュンガ虐殺，隠された真実」というタイトルが掲げられ，沈黙の覆いが未だにコモロとマダガスカルの関係に影を落としていると記している。

7　サベナとザナタニ

コモロ諸島・モエリ島のＮ村に住む50代後半のハリマ（仮名）という女性は，コモロ人なのにコモロ語をうまく話すことができず，そのことでよく村の人からからかわれていた。私が話を聞きに行ったときにも，言葉につまるとマダガスカル語がでてきてしまい，いつもハリマの娘が通訳をしてくれていた。１度ひどい熱帯性マラリアを罹患し，生死の境をさまよってからは，コモロ語をすっかり忘れてしまい，晩年には，ほとんどマダガスカル語しか話せなくなってしまった。それでも，娘がマダガスカル語に堪能であったし，村にはほかにも何人かマダガスカル語を話す人がいたので生活に困ってはいなかった。ハリマはトゥンバ（tromba）というマダガスカル北西部を起源とする憑依霊の治療儀礼を行う集団の中心人物の１人であり，村人からしばしば病気の相談などを受け，少しは稼いでもいたようだ。

ハリマは，マダガスカル生まれである。父親はモエリ島のＮ村出身の航海士で，1940年代にフランスの海運会社の船員としてマダガスカルを訪れ，そこでマダガスカル生まれのインド人の女性と結婚しマジュンガ近くのマルヴァイ（Marovoay）に住んだ。ハリマは次女として生まれ，マルヴァイで育った。姉は大きくなるとアンジュアン島の男性と結婚して，アンジュアン島に移り住んだ。ハリマは，１度マルヴァイでマダガスカル人と結婚したが，子供を死産した後に離婚する。その後，マダガスカル人とコモロ人の混血の航海士と結婚し，ヌシ・ベに移り住み，そこで娘のヌルを産んだ。ヌシ・ベで

は，白人の家のメイドや子守りとして働いていた。その後，ヌルが10歳前後になる頃に，夫との関係が悪くなったハリマは娘を病院に連れて行くと言い残して家を出て，娘と２人でマジュンガで暮らすようになる。虐殺事件が起こったのはそのすぐ後だったという。ハリマは，コモロ人の父親と，コモロ人との混血の夫をもち，コモロ人の名前をもつムスリムだったので，身の危険を感じ，娘を連れて逃げたという。トラックの荷台に隠れて救助船が来たと聞いた港に向かったが，道にはコモロ人の遺体が無数に転がり，ベツィレーバカ人が大きな山刀をもってうろついていたのでたいへん恐ろしかったという。

なんとか船に乗ることができ，モロニについた後，父親の親族を頼りにムワリ島のＮ村に向かった。何組かのサベナが同時期にＮ村にやってきたが，ハリマと娘はコモロ語をほとんど話すことができずに苦労したという。マダガスカルとコモロでは，例えばご飯を食べるときに地面に置いて食べるなどの生活習慣も異なり，最初は困惑したという。まだ若く，美しかったハリマはたいそうもてて，ニュマシュワ村で７人の男性と結婚したり，同棲したりをくり返したが，子供はできず，娘のヌルと暮らしていた。その後，ヌルは，大きくなるとニュマシュワ村の漁師の男性ハマダと結婚し，40歳までに11人の子供を産んだ。虐殺事件から20年目にあたる1996年の調査の時には，ハリマは多くの孫に囲まれて幸せに暮らしていた。そして，それから９年後の2005年，虐殺事件30年を前にしてハリマは病気で亡くなった。ハリマは，1976年以来１度もマダガスカルに帰ることはなかった。

コモロ諸島の村々には，ハリマのように帰還したサベナたちが多く住んでいる。1977年１月には，コモロ政府が手配した救援機で多くのコモロ人がモロニに帰還した。またマダガスカル政府もコモロ人を帰還させるために２隻の船（“Ville de Tuléar”と“Ville de Manakara”）を用意した。マジュンガ市からコモロに帰還した人数は16,000人を超えた。ラツィラカ大統領は３万人を帰還させることを要望したが，コモロ政府はすでに３億５千万コモロフランの費用を支払い，さらに５万人以上いるコモロ人移民を帰還させる余裕はなかった。コモロ政府は緊急の支援金を確保するために50％の割増税を３ヶ月間課し，さらに給料への追徴課税を行ったにもかかわらず，避難民への援助はわずかだった。

マジュンガからコモロ人が避難する時に用いたベルギーの航空会社名サベナにちなみ，この時の避難民はサベナ（Sabena）と呼ばれている。サベナは，マジュンガなどに所有していた土地や財産の全てを失い，わずかな持ち物だけでコモロの首都モロニに降り立った。コモロ政府は，コモロ諸島の各地に存在している親族を頼りにするようサベナに通告し，サベナはそれぞれ各地に散らばっていった。この事件では，コモロ人の寛容さと，村や親族のつながりの強固さが多いに示され，サベナの多くはすぐに自分たちの居所を確保することができた。サベナの中には，すでにコモロの親族との関係もなく，土地も職も持たず苦労した人々もいたが，彼らに対しては地域的な支援がなされた。モ

エリ島にもサベナが多く帰還して各村に散らばったが，例えばジャンド地区のように，家を建てるための土地を持たないサベナたちに村が新たな地区を提供し，まとまって住むようにしたところもある。

16,000人という帰還者の数は，当時のコモロの人口の５％であり，そのインパクトは人口学的にも，経済的にも大きな影響をコモロにもたらした。1980年の国勢調査によれば，グランドコモロ島の住民の4.7%がマダガスカルの出身であるか，マダガスカルから来たという高い割合が出ている[18]。同様に，アンジュアン島では2.8%，モエリ島では2.6%である（Blanchy and Mroudjae 1989: 45）。このうち，29.2%がマジュンガの虐殺事件の時に帰還した人々だとされる。

サベナがコモロ社会に与えた大きなインパクトはまず経済的なものである。マダガスカルの商業都市で暮らしてきたサベナの女性たちは，小売業などの商売の知識を身につけており，コモロに戻ると中央市場ヴォロヴォロなどで商売を始めた。伝統的な交換経済とは異なる，他者を相手とした資本主義的なその商売のテクニックや，利益のための裏取引を意味するるムカラカラ（mkarakara）という言葉が，彼らによってコモロに広まった。ムカラカラという語は，現在では政治における汚職の手口や，学校での試験における不正行為などを指すのにもよく用いられる言葉となっている。

ブランシーによれば，彼らはまたアソシエーションを組織するなど活発な活動を展開した。女性が公に活動することに否定的なコモロの伝統に縛られないサベナの女性は，家や畑の仕事から飛び出して，１人で行商などを行うことも厭わず，コモロにおける都会の女性の職業や生き方に大きな変化をもたらした（Blanchy and Mroudjae 1989: 47; Mohamed 2007: 82-87）。実際，サベナの女性は，必要に迫られたこともあり，よく働き，生活費をかせぎ，商売のネットワークを組織している。

そうしたサベナ同士の結びつきは経済的なものに留まらず，言語文化的な側面においても大きな影響が見られる。女性のサベナ同士で大結婚式のための頼母子講（mtsango）のような組合を組織したり，手工芸品を作ったり，マダガスカルで行っていた新しい形式の女性のダンスや，イスラム神秘主義教団の儀礼を行うなど，彼らの活動はコモロの文化に新たな更新をもたらしている。トゥンバと呼ばれるサカラヴァ族を起源とする精霊憑依の儀礼のコモロにおける流行にも，サベナの存在が大きな影響をもたらしている。

しかし，帰還して間もないサベナの多くはコモロでの生活に馴染めず，早い時期に仏領レユニオン島やザンジバル島（花渕 2007），そしてフランス本土などへと多くが移住していった。南フランスのマルセイユには特に多くのサベナが移住した。1976年には，彼らによって《L'Association des Zanatany de Majunga à Marseille》が設立され，現在でも活動している[19]。

また，1980年代にコモロとマダガスカルの関係が落ち着くと，再びマジュンガに帰還した者も多く，1990年代までにコモロとマダガスカルの移民ネットワークはほぼ復活し

た。特に，サベナの中でもザナタニ（Zanatany）と呼ばれる人々はマダガスカルとの関係において重要な役割を果たしてきた。ザナタニとは「土地の子供」という意味のマダガスカル語で，マダガスカルで生まれた全ての外国人のことを指すが，より狭義には，外国人とマダガスカル人のカップルの子供で，マダガスカル生まれの混血の人々のことを指す[20]。コモロ人のザナタニの場合，コモロ人とマダガスカル人の混血でマダガスカル生まれの人々のことであり，多くの場合，コモロ人の父親とマダガスカル人の母親との間に生まれた混血である。一方の親がマダガスカル人であることにより，彼らはマダガスカルの国籍をもつ。また，ザナタニには，両親ともにコモロ人であるが，マダガスカルで生まれた子供も含まれる。彼らは，「出生地主義」をとらないマダガスカルではマダガスカルの国籍をもたない[21]。

サベナの若い世代の多くはザナタニであり，マダガスカルとコモロの二重国籍を持っている者も少なくない。彼らは流暢に２つの国の言葉を話し，しばしば商売のためや留学のためにコモロとマダガスカルの間を往来している。コモロ人とマダガスカル人の両方の親族をもつ彼らの存在が，現在の両国間の新たな関係を生み出し始めている。

1976年の事件から35年。現在ではマダガスカルとコモロの関係も大きく変化している。アリ・ソワリヒ大統領による社会主義革命が失敗に終わった後，1989年まで独裁的な政治を行ったコモロのアーメド・アブダラ大統領と，1976年から1993年までやはり独裁的な政治を行ったマダガスカルのディディエ・ラツィラカ大統領の政権時代，コモロとマダガスカルの関係は良好なものであり，事件の恐怖が治まると両国間の移動も平常化した。しかし，このラツィラカの時代，マダガスカルの経済的発展は停滞し，コモロ人にとってマジュンガ市を含めてマダガスカルは移住するほどの大きな経済的魅力をもつ土地ではなかった。そのため，新たにマダガスカルを目指すコモロ人移民の数は減少した。サベナとしてコモロに帰還した人々の中には，情勢が安定するとマジュンガ市に戻った人々もいたが，むしろサベナの多くはコモロに残るか，フランスや他の外国に移住して行くことが多かった。2005年のマジュンガ市における調査でコモロ領事に話を聞いたところ，昔に比べてコモロ人移民の数は減り，マジュンガ市における政治的，経済的な勢力としても衰退してきたと述べていた。

しかし，サベナやザナタニを中心として，マダガスカルとコモロ間の結びつきは新たな形での展開もみせている。マジュンガに古くから住むコモロ系の人々と，コモロ諸島に住むサベナの親族とのネットワークは活発であり，頻繁に相互的な往来が行われている。彼らの一部は，安い商品や食料をマダガスカルからコモロへ輸出して小売店へ卸す仲買業を行っている。フランスフランがユーロに切り替わるまで，コモロフランとフランスフランが固定レートで交換される CFA フラン圏に属していたことにより，通貨価値が高く維持され，周辺の諸国よりも物価が高かったコモロは，マダガスカルから安い商品や農作物を輸入してきた。そうした輸入業や仲買に従事する人々には，マダガスカ

ルとのコネクションをもつサベナが少なくない。

また，1990年代に深刻になったコモロ国家の政治的不安定や経済的困窮は，マダガスカルのほうが「まだましだ」という人々を押し出し，目立つほど数は多くないが，出稼ぎのために船底に隠れてマダガスカルに不法入国するような人々についての話もしばしば聞かれる。

さらに，植民地時代と同様に，大学教育や専門教育の機会を求めてマダガスカルに留学するコモロ人学生も依然として多くいる。1990年代になり，レユニオン島を含め，フランスへの留学のためにヴィザを取得することはますます困難になり，留学のための奨学金の獲得もほとんどできなくなった。フランス国籍を持たない，貧しいコモロ人学生にとって，マダガスカルは仏語による高等教育を受けることができ，学費や生活費などの留学費用がもっとも安く済む土地である。特に，医学や薬学，看護学などの医療系の大学や専門学校で学ぶコモロ人学生は多く，コモロ人学生による組合も各地にあり活発に活動している[22)]。

移住の方向は一方的なものではない。マヨット島をのぞき，コモロ諸島へのマダガスカル人の移住は1990年代までそれほど多くなかったと思われる。言語や宗教的慣習の違いや，1976年の虐殺事件により顕在化した民族的対立の影響も大きかったのだろう。首都モロニのような都市部においても，1990年代半ばまでは，マダガスカルからコモロへと移住する人々の波は目立つことはなかった。しかし，1990年代末からマダガスカルからコモロへと移住したり，出稼ぎにきたりするマダガスカル系の人々が首都モロニの圏内で顕著になった。中央市場ヴォロヴォロで商売をする人々にはサベナが多かったが，近年ではマダガスカル系の人々が多くなり，マダガスカルから運んできた古着や食料や生活雑貨を売っている。また，市場の近辺にはマダガスカル系の人々が集住する地区ができている。ヴォロヴォロ市場からエル・マールフ国立病院へと向かう幹線道路沿いに立ち並ぶ，古着や生活雑貨を売る屋台のほとんどがマダガスカル人によって経営されている。モロニにはマダガスカル系の人々のための教会も建てられ，移民の組合が組織されている。フランスや他の海外を結ぶグローバルなネットワークの展開とともに，コモロとマダガスカルの関係はより相互的なものに発展してきている。

8　おわりに

1976年の事件の痕跡は，現在では，少なくともコモロやマジュンガの日常生活の中では表面的には見えなくなってきている。コモロ諸島のサベナも，マジュンガに戻ったコモロ人も，あの事件のことは忘却したかのようであり，抵抗なくマダガスカル人との交流を築いているようである。しかし，聞き取りをすれば当事者としての経験に関するさまざまな語りが採取されるという事実が示すように，この事件の記憶は未だにコモロの

人々の経験による記憶として強く残されているということも事実である。コモロとマダガスカルの新たな交流が展開する中で，この事件の記憶がどのように語りつがれて行くのだろうか。

ハリマの娘ヌルは，事件当時10歳であったが，母親とともにトラックの荷台に隠れて，命からがらマジュンガを脱出したことをはっきりと覚えているという。道路に，山刀で殺されたコモロ人の遺体が多数ころがっていたことも記憶しており，それは彼女の人生で最も恐ろしい風景だという。

しかし，彼女は今，マダガスカルとのつながりを再び築こうとし始めている。1975年の事件によりヌルは父親と生き別れになっており，その後まったく連絡をとることができないでいた。ところが，ハリマの死後，マジュンガの事件から約30年後に，娘のヌルは，父親と連絡を取ることができ，夫とともにヌシ・ベを訪れて父親と再会を果たした。父親はすでに別の家族をもっていたが，ヌシ・ベで農業を行い，大きな土地を所有して裕福な生活をしていたという。漁師の夫と11人の子供と暮らすヌルさんの生活は苦しい。ヌルさんは，家族全員でヌシ・ベに移り住むという夢をもつようになり，そのための準備を進めている。すでに，中学校を中退した息子を父親の元に送り出した。「私はザナタニであり，私と母にとってマダガスカルは生まれた土地なのです」とヌルは言う。少なくとも，ヌルにとってマジュンガ虐殺は忘却されつつありかのようであり，マダガスカルとコモロのあいだに，新しい世代の関係が結ばれようとしているようである。

注

1）Celton（2007）は，主にマジュンガにおけるコモロ人とマダガスカル人の双方から多くの貴重な証言を収録している。公的な記録においてはほとんど隠されている個人の経験を通じた事件の姿は，そうした証言を通じてのみ記録として残されうるだろう。

2）本稿の内容は主に文献研究のほか，1994年以降継続しているコモロ諸島での調査，2005年12月マジュンガ市におけるコモロ系移民についての短期調査による資料に基づいている。筆者は，コモロ諸島に広く見られるトゥンバ（Tromba）と呼ばれるマダガスカル北西部を起源とする憑依霊信仰の調査を行う過程で，その活動の中心を担うサベナの人々に多く話を聞く機会を得た（花渕 2006, 2007, 2009）。尚，本稿におけるマダガスカル語の表記および事実関係について，深澤氏および飯田氏から貴重なコメントを頂いた。この場を借りてお礼を申し上げる。

3）コモロ諸島は，グランドコモロ（現地名：ンガジジャ）島，アンジュアン（ンズアニ）島，モエリ（ムワリ）島，マヨット（マオレ）島の4島からなる。マダガスカルからは最南端のマヨット島まで300kmの距離である。コモロのハハヤ空港からマジュンガのフィリベール・ツィラナナ空港までは約1時間ほど，船では12時間ほどかかる。

4）興味深いことに，グランドコモロ島では主にダブルアウトリガー付カヌーを使用するのに対し，他の3島ではシングルアウトリガー付カヌーである。これは，グランドコモロ島の漁師が複数のカヌーによる追い込み漁を行うことにも関係しているものと考えられる。

5）最近の遺伝子によるコモロ人の起源に関する研究（Chiaroni *et al.* 2004）では，少なくともグランドコモロ島民に関しては，東アフリカ系の遺伝子をもつ割合が多く，東南アジア系の遺伝子はごくわずかにすぎなかった。

6）マダガスカル・トリビューン紙のインターネットサイト（http://www.madagascar-tribune.com/Bientot-un-musee-special,12493.html）の2009年８月12日の記事には，ブエニ県ミツィンズ（Mitsinjo）区のカツェピ村（Katsepy）で，サカラヴァのアンタラウチャの人々が，伝統的な布であるスバイヤを展示する博物館の開館を前に記念式典を開催したことが掲載されている。

7）コモロではショールのようなサハレ（Sahare）とスバイヤを一緒に身にまとう。また，スバイヤの布は，死者の化粧や装飾に必要な物ハファニ（hafani）の中でも重要な，死者の棺（djanaza）を飾る布（bafuta）としても用いられる。スバイヤの語源はアラビア語で「染めた布」を意味する‘subaghiyya’だという説もある。また，このスバイヤは，マダガスカルやコモロ，ザンジバルなどで広く見られるマダガスカル系憑依霊のトゥンバの儀礼においてトゥンバの衣装として用いられている。

8）現在でもアンタラウチァ族はアラブ起源の民族であると自ら認識しているが，サカラヴァ族の中に含まれているという認識ももっているようであり，両者の帰属関係については不明である。

9）コモロ諸島では，１人で32人の敵を倒したグランドコモロ島・イコニ村の英雄 Karibangoue の伝承や，奴隷とされることを恐れて断崖から身を投げた女性や子供たちの伝承など，この襲撃についての数多くの口頭伝承が残されている。捕えられて奴隷にされたコモロ人はマダガスカルやサン・マリ島などに連行された。

10）家臣の多くはアンタラウチァであったとされる。

11）深澤氏によれば，サカラヴァ人やツィミヘティ人などが，アンタイサカ人やアンタイムル人などマダガスカル南東部出身者を指していう「ベツィレーバカ」という呼称は，そもそもはマジュンガ県北部での呼び方であった。「ベツィレーバカ」は，「数多く（be），疲弊することなし（tsyrebaka）」を語源とする他称だとされ（森山 1993），貧しい肉体労働者に対する軽蔑的な呼称でもある（http://www.aa.tufs.ac.jp/～nfuka/report/seikatu02/2.html）。

12）この時期，ディエゴ・スアレスに移住したコモロ人で，フランス軍によって送還された人々のことはシムシム（Sim Sim）と呼ばれているという（Blanchy et Mroudjae 1989: 46）。

13）Delval（1978）はマジュンガ市のコモロ人を約27,000人，マダガスカル全土では55,000人以上としている。

14）2007年の Études Océan Indien, No. 38-39には，マジュンガ虐殺事件についての Mohamed（初出1989），Rafidison（初出1992），Celton（初出1994）の３つの論考が再収録されている。

Mohamed は，コモロ人研究者であり，虐殺事件の政治的，社会的要因について分析するとともに，グランドコモロ島に帰還したサベナについて詳しい調査を行っている。

Celton は，事件の当事者に対する聞き取り調査を行い，当事者の解釈もとにして，移民の統合という視点から当時のマジュンガ市の政治的，社会的状況を分析している。

Rafidison は，1740年以降の移民によって形成されてきたマジュンガ市の歴史を検討し，他民族都市における民族間関係という視点から事件へと至る歴史的経緯をについて政治的視点から分析している。

Vérin は，アリ・ソワリヒの社会主義革命における事件の位置づけとその意味について分析している。

Gou は，事件の経緯とその解釈について整理し直し，事件から30年経ても，なぜあれほどまでの虐殺が短期間に発生したのかという，その原因についてはほとんど明らかにされていないことを指摘している。

15）村の年齢階梯制度は島によってその内容が異なり，グランドコモロ島ではアンダ，他の島ではシュングと呼ばれている。この制度では男性は一生に１度はンドラ・ンク（Ndola Nkuu）という大結婚式を村で開催しなければならず，その為に花嫁の両親に支払う婚資や花嫁に贈る金の装飾品など，多額の費用を花婿が用意しなければならない。

16）深澤秀夫氏によれば，「マダガスカル人の側は，イスラーム教徒でコモロ語を母語とするコモロ人を，〈シラーモ〉（silamo　イスラームの訛）とも総称して蔑視する傾向が強い上（日本人の韓国・朝鮮 人に対する感覚に似通ったものがある），倹約や節約の観念を持ち家主などになって小金を溜めた事に対する妬み，フランス植民地時代に下級警察官吏として自 分たちを直接的に取り締まったことに対する恨み，などなど複雑な感情を醸成していた。」（http://www.aa.tufs.ac.jp/～nfuka/report/seikatu02/2.html）

17）マジュンガ市にはコモロ人によって建立されたモスクが多くある。また，19世紀，東アフリカ海岸部からコモロ諸島にかけて導入されたイスラム神秘主義教団の活動は，コモロ人神学者によってマダガスカルに伝えられ，大きな影響を与えた。

18）人口統計に関しては資料により数値のばらつきがあるため正確とは言えないが，国連による Demographic Yearbook 1988によれば，1980年のコモロ諸島の総人口は335,150人，グランドコモロ島182,656人，アンジュアン島135,958人，モエリ島16,536人である。

19）この組織は後に Rassemblement des Jeunes Comoriens Natifs de Majunga à Marseille（RJCMM）と改称し，2005年にはマジュンガ虐殺事件の29年目の追悼式典を開催している。

20）ザナタニという呼称は，マダガスカル独立の1960年以降に使われるようになったという説もある（2007年８月11日，Les Nouvelles 紙における Renée Raza 氏の署名記事 “Les Zanatany à Madagascar”）。アラブやアフリカの人々との古くからの混血のほか，マダガスカルには，フランス人をはじめとしたイギリス人，ノルウェー人，イタリア人など多くの西欧人や，インド人，中国人などとの混血も多く，ザナタニによるアソシエーションの活動も活発化している。

21）しかし，国籍取得に関しては常に裏ルートがあるようであり，父親の名前をマダガスカル人の名前に変えるなどしてマダガスカルの国籍を取得したケースもあった（Celton 2007: 199）。ちなみに，コモロは父母両系血統主義をとるので，ザナタニの多くはコモロの国籍も取得することができ，２つの国籍をもつ二重国籍のものが多い。

22）2005年12月16日～17日，マダガスカル北西部にあるマジュンガ市の高級ホテル・ラ・ピシーヌにおいて，マダガスカル全土からコモロ人留学生が集まりコモロの社会問題や留学生の様々な問題について話し合うための会議が開催された。レセプションにはコモロ領事やマジュンガ市長も招待されたが，マジュンガ虐殺事件について取り上げられることはなかった。

文　献

Blanchy, Sophie et Said Islam Moinaecha Mroudjae
1989 *Le statut et la situation de la femme aux Comores, rapport de recherche, Projet COI/86/0007*. Moroni: PNUD.

Celton, Marie
2007 Les affrontements entre Malgaches et Comoriens en 1976 à Majunga: Événement isolé ou échec de l'intégration d'une minorité ethnique immigrée? *Etudes Océan Indien* 38-39: 169-319.

シャニュー，エルヴェ／アリ・ハリブ
2001 『コモロ諸島』花渕馨也訳，東京：白水社。

Chiaroni, J., M. Touinssi, C. Frassati, A. Degioanni, M. Gibert, D. Reviron, P. Mercier et G. Boë Tsch
2004 Genetic Characterization of the Population of Grande Comore Island（Njazidja）According to Major Blood Groups.

Covell, Maureen
1995 *Historical dictionary of Madagascar*. London: Scarecrow Press.

Delval, Raymond
1978 Les migrations comoriennes à Madagascar. Université d'Aix-en-Provence, Etudes et documents, No.11

デシャン，ユベール
1992 『マダガスカル』木村正明訳，東京：白水社。

Gou, Ali Mohamed
2001 Archéologie d'un génocide（1976）: Le massacre des Comoriens de Majunga, *TAREHI* 4: 8-12.

花渕馨也
2006 「海を渡るトゥンバ ―― インド洋西域における精霊憑依」『自然と文化そしてことば』2：106-116。
2007 「ンダマルとの再会：コモロ人とマダガスカルのトゥンバについて」『SERASERA』17: 5-8。
2009 「不確かな他者として振舞う技法 ―― コモロにおける精霊憑依と自己変容」『文化人類学』74(3)：459-477。

Ibrahime, Mahmoud
2007 Madagascar, un modèle pour les Comores?（1908-1965）. In Didier Nativel et Faranirina V.Rajaonah（eds.）*Madagascar et l'Afrique: Entre identité insulaire et appartenences historiques*, pp. 273-293. Paris: Karthala.

Kamar'eddine, Saindou
2006 Mémoire/Décembre 1976 : Massacres de mahajanga, la vérité enfouie. *Kashikazi*, 58: 43-44.

Live, Yu-Sion
2003 Note d'introduction sur les musiques traditionnelles des Antakarana.『アジア・アフリカ言語文化研究所』65: 45-66。

Mohamed, Mzé
2007 Les “Sabena” de la Grande Comore : Étude d’ une migration. *Etudes Océan Indien* 38–39: 11–112.
森山工
1993 「森の民，湖へ行く：北東マダガスカル，ベツィミサラカにおける伝統と現在」『東南アジア研究』31(1)：25–42。
Nativel, Didier et Faranirina V. Rajaonah,（eds.）
2007 *Madagascar et l’Afrique:Entre identité insulaire et appartenences historiques*. Paris: Karthala.
Rafidison, Nathalie
2007 Conflits ethniques et leur resolution à Majunga de 1740 à aujourd’ hui. *Etudes Océan Indien* 38–39: 113–168.
Vérin, Pierre
1986 *The History of civilisation in North Madagascar*. Rotterdam and Boston: A. A. Balkema.
1988 Les Comores dans la tourmente: vie politique de l’archipel. *Travaux et documents*（CEROI）, 6
1994 *Les Comores*, Paris: Karthala.